

序の歌

いらいらしているときにぬいぐるみを抱くとなんだかなごむのはなぜかしら？ 心の中に冷たくて新鮮な風が通ったようになって、透明になるの。

あと、スヌーピーとかピングーを見ていると同じ感じになる。スヌーピーって名前からしてなごまない？ 目の前のワンコに自分が「スヌーピーー！」って呼びかけるところを想像するだけで笑っちゃうわよ。かわいいね。スヌーピーは。

あとこの間思いたって、ピングーがお母さんを呼ぶときの雄叫びを真似してみたの。マ、マー！ 自分の口があのおレンジのラッパみたいになるのを想像してね。そしたらなんか無性に感動して、泣きそうになっちゃったの。

なんでかしら？

ねえ、なんでだと思う？

1

道端のJポップ、電気屋の呼び声、『土曜夜九時』の宣伝文句、横断歩道の信号音、桃色の「待ったあ？」、自動車のブレーキ、対向車のクラクション、迷い込んだ蟻、ざわついた視線、風俗の勧誘、酔っぱらいのバカ騒ぎ、カラオケの客引き、遠くで鳴る救急車のサイレン、携帯電話の着信音、パチンコのじゃらじゃら、恋人たちの大仰ないちゃつき、映画の予告編、暗転する視界、転がる空き缶、中華料理屋の金属椅子、もやしとキャベツが宙に舞う音、業務用換気扇が吹き出す油臭い風、ねずみが側にいる気配、どこかの蛍の光、顔面すれすれで通り抜ける男、華麗なティッシュ配りの技、自動ドアが開いたときに鳴るピンポン、コンビニのレジの音、事務的な「ありがとうございます。」、ストーリートミュージシャンの甲高い歌、ビニール袋をくしゃくしゃにする音、今週のポップチャートカウントダウン、LEDの絡まった街路樹のさわめき、三段階ネオンサイン、高速道路

の工事、地下に反響する削岩機、「号外です！」の声、電車が遅れたとのアナウンス、電車の軋み、構内の足音、電光掲示板の点滅、

「しばし、静粛に、願います！」

「しばし、静粛に、願います！」

「しばし、静粛に、願います！」

カオリは叫んでいた。街に投げ込まれるカオリのからからした声。

春。夕方。八階建てのずんぐりしたファッションビルの前にあるちよつとした広場のようなどころで、カオリは叫んでいる。

カオリはあるときから、彼女によって『演説』と名付けられた、一種のパフォーマンスのようなもの始めていた。今日もその『演説』の日。

「私の話を、聞いてください！」

「私の話を、聞いてください！」

「私の話を、聞いてください！」

「先日、わたしはハンバーガー・チェーン店に出向きました。もちろんハンバーガーを食べるためにです。でも、実のところ、わたしはハンバーガーなんて大嫌いなんです。それなのに、一ヶ月に一度くらいはかならず、無性に、いても立ってもいられないくらい、てりやきバーガーが食べたくなるんです。なんなのでしょね、この症状は！ しかたないので、そういうときにはさっさとハンバーガー・チェーン店に行くことにしています。なぜなら、この症状はてりやきバーガーを口にするまで決して治らないからです。そういうわけで、店に着くとわたしはさっそくてりやきバーガーを注文しました。食べたあと頭がガンガンしてきて、脳みそのすべての毛細血管にマーガリン状の脂の塊をパテで埋め込まれたような気分になるのはわかりきっているんです。なのに、紙に包まれたコロンとまるっこい物体を眺めていると、なんとも幸せな気分になるのはなぜなのでしょうね。包み

紙はハンバーガーのぬくもりと湯気で少ししっとりしています。これをはぎ取ると、あのてりやきソースのてらりと光る琥珀色と、マヨネーズのぷりっとした卵色が眼前に現れるわけです。ああ、愛しの君。わたしはもう我慢ができない。てりやきソースで手がべとべとになるのも構わずに包み紙をむしり取ると、見慣れた恋人の姿がなんだかやけにすつきりしているではないか。わたしは違和感を覚えました。違和感の原因がどこにあるのかわからず、わたしは恋人の体をひとつひとつ点検しはじめました。『上のバンズ……、マヨネーズ……、レタス……、てりやきソース……、パティ……、下のバンズ……』不足のものはいつきません。わたしは不審に思いながらも、冷めるのがいやだったのでさつそく頬ばることにしました。しかし、バンズを両手で掴んだその瞬間、わたしは悟ったのです。指の腹にあたるはずの、つぶつぶがない！ ああ、バンズにくっついてたゴマつぶがないのだ、と！ わたしは深く落胆しました。てりやきバーガーのゴマつぶは、ちよつとした茶目つ気であり、ちよつとした親切心だったんです。いわば、ハンバーガーに残された最後の人間性だったのです。それはコミュニケーションの可能性だったのです。それが、ついに削られたんです。」

カオリは興奮して、タータン・チェックの巻きスカートの裾がはだけているのに気がついていかなかった。右足の太もがあらわになっている。うすネズミ色のコートを着たおじさんが立ち止まって、好奇の目でじろろカオリを見ていた。太ももと顔を交互に、舐めまわすように点検している。おじさんの目はどろんと垂れ下がったようになっていて、下唇だけが変につやつやしていた。ときどき舌が飛び出してきて、下唇を湿らせているのかもしれない。それ以外の通行人は、この一心不乱に何かを叫び立てている女の子をちらりと見ては、すぐに目をそらしていた。

カオリ、もうやめようよ。誰も聞いてないし、聞いていたとしたって、この気持ち悪いおじさんみたいにいやらしい気持ちで聞いているだけだよ。

わたしは心底悲しい気分になって、カオリから目を背けた。

でもわたしはカオリに『演説』を手伝ってくれ、なんて一言も言われたことはなくて、ただ勝手にカオリに付き添ってこうしてここにいるわけなのだから、何を言ってもしかた

ないのだった。わたしはカオリが『演説』を始めたときから、この思いつきがあんまり良いアイデアとも思えなかったけれど、なんとなく心配だったのと、なんとなく心に引っかかるものがあつて自分の目で見えておきたかったので、時間があるときはこうしてカオリに付いてくるのだった。でも何をしてもなく、ぼーっと眺めているだけで、だいたいはカオリの『演説』が人々に無視されている状況を苦々しく感じていた。もうちよつとやりようがあるんじゃないの？ と心の中で思いながら、それでもやっぱり見にきてしまうのだ。

わたしの頭の中に、『人々は腕の良い演奏家の前でしか踊らないし、幸福なパン屋しか信用しない。米は米屋で買うものだし、ドンキホーテでは買わないのだ』という文句が浮かんだ。この奇妙な文句は、おとといライブで踊りながら思いついたものだ。思いついたときには、これはすごい詩だ！ と自分のひらめきに驚いて、踊っている間も何度も脳内でリピートしていたのですっかり覚えてしまったけれど、今となってはこれが何を意味する文句なのかよくわからなくなってしまった。しかし、意味はともかくとして、言葉の感じが何かしらの真実を言い当てている風で気に入っている。

『人々は腕の良い演奏家の前でしか踊らないし、幸福なパン屋しか信用しない。米は米屋で買うものだし、ドンキホーテでは買わないのだ』

そうだよ、カオリ。君はドン・キホーテなんだよ。もう帰ろうよ。

「てりやきバーガーから心が消えた！ とわたしは思いました。もうわたしのことは忘れたんでしよう。別人になつてしまいました。食べたあとに後悔するのをわかっていながら、わたしが今までてりやきバーガーを愛してきたのは、もしかしたらこのゴマつぶの存在があつたからなのかもしれません！ ゴマつぶの存在は、誰かにこれを食べてもらえるように、食べてもらう人に喜んでもらえるように、そういった心くぼりのぎりぎり最後の砦でした！ てりやきバーガーは最後の砦を超えてしまったんです。もはやこれは効率だけで成り立っている物体です。これはすでに食べ物ではなく、物体です！ 物体「B」です！ 悲しいことですが、わたしはもうこの物体「B」を口にすることはないでしょう。」

そういえばおとこのDJはパン屋っぽかった。しかも、良いパン屋。腕の良いパン屋。パンのたねが発酵して膨らんでいくみたいに、わたしの中で音楽が膨らんでいったもの。それは幸せな体験だった。充実してた。最初の方に作りはじめたパンは、わたしが踊っているうちにチン、と焼き上がって、ふんありキツネ色のつやつやした山形食パンはほんのり甘くておいしかった。口中に幸せな気分が広がるおいしさ。ありがとう！ って言いたい気分だった。そう、だからきつと『幸福なパン屋』なんてフレーズが出てきたんだ。

『幸福なパン屋』といえば、わたしは『あまり幸福そうではないパン屋』も知っている。実家の近くのバス通り沿いにあるパン屋。その跡取り息子はわたしの叔母さんの同級生なのだけど、食品を扱う仕事柄清潔さは必須条件のはずなのに、どういうわけか長髪で、しかも、結わいてコック帽の中に入れておけばいいのに、ヒッピーみたいにだらんと肩まで垂らしているのだ。別にヒッピーのような長髪が嫌いだ、と言っているわけじゃなくて、そのだらんとした髪の毛でパンを袋に詰めて、「ありがとうございましたー。」ってやられるとちよつとね、という話なのだ。それに、ヒッピーみたいと言っても、芸術家風を吹かせた自由さは全然なくて、どちらかといえば、井戸から這い出てくる怨霊のような雰囲気。でもわたしが中学生だったときには、学校の帰りに立ち寄ると売れ残りをおまけでくれたりしていたので、あんまり悪く言っではいけないかもしれない。

何年前か、お正月に親戚が集まったとき、母親と叔母さんとおばあちゃんがその跡取り息子の噂話をしていて、もう四十をとくに過ぎていくけれど結婚してないし、彼女だっているのかね、なにしろあんな風貌でしょ、なんて言っていて、さすがにおせっかいだと思っただけれど、わたしも話を聞きながら想像してみると、早朝三時だか四時だかからパンの仕込みを始めて、通勤、通学前のお客さんが多い時間までに急いでパンを焼き上げ、家族で細々とやっているからアルバイトなどはないので、その後店内でレジ打ちもし、頃合いを見計らって追加分のパンを焼き、そのまま閉店の六時まで毎日店番もしなくてはいけないのだ。いつ女の人と出会うチャンスがあるのだろう。しかも、毎日朝から晩まで家族と顔をつきあわせていないといけないし、次の日朝が早いから、友達と飲みにいたりすることもそうできなそうだ。これはちよつとつらい。第一、跡取り息子の表情はめっちゃくちや暗い。

そうして考えてみると、「あまり幸福そうではない」パン屋が作るパンってどうなんだろう、と思った。パンって素手で生地をこねるし、こねるといふ作業には、彫刻家が自分の使う粘土をこねるときのように、どこか精神的な側面があるような気がする。自分の「気」を対象に練り込む、というような。なんだかそう言うとか大袈裟かもしれないけれど、とにかく、こねるといふ行為は、対象と密接に関わる行為なわけである。そう考えると、「あまり幸福そうではない」パン屋が作ったパンって、なにか負の感情が練り込まれてそう、なんて思ったり。

視界のはじっこに今までなかったような存在感を感じて、ふとカオリの方を見ると、二人の警官に職務質問されていた。

警官は、カオリの左右それぞれ四十五度の位置に、ぴったり立ちはだかるようにしていた。最近、すぐに警察が来るような……。この間も別の場所で『演説』中に注意されたのだ。街なかで声をあげることって、そんなにいけないことだろうか。いくらドン・キホーテ的行為とはいえ、これは犯罪なのだろうか。

「あっ、逃げたっ！」

カオリは警官の間をついて、逃げていた。たぶん逃げる必要はないのに。逃げて捕まったらよけいにややこしくなるのに。

カオリはこういう人なのだ。

脱兎の如く、という言葉があるけれど、本当にカオリは街を走るウサギのようだった。